

元岩手大学平泉文化研究センター特任教授伊藤博幸氏

2022年9月19日朝、何気なく目にした新聞訃報欄の、「奥州市 伊藤博幸（74）水沢…」が目にとまった。40代の頃から独特の風貌を漂わせた白髪で、60歳を過ぎても変わることがなかったが、晩年は体調の変化をうかがわせていた。

伊藤さんは、2012年4月、岩手大学に平泉文化研究センターが設置されると、勤務されていた奥州市埋蔵文化財調査センター所長を辞され、岩手大学の特任教授として着任された。以来、客員教授に身分換え後の5年間を含めて、2022年3月末までの10年間、平泉文化研究センターの研究・教育活動を中心となって支えてこられた。新設の、しかも平泉を対象とした大学研究組織に対して、伊藤さんのひとかたならぬ思い入れがあったのではないかと想像する。

伊藤さんは、国土舘大学に学ばれた後、水沢市教育委員会に奉職。胆沢城跡の発掘調査に従事され、鎮守府胆沢城がどのような性格をもった場所であったかについて、長年にわたって主要な研究テーマとされ、「古代胆沢城の基礎的研究」で学位を取得されている。伊藤さんの研究は、広く東国古代を視座としていたところに特徴があり、瓦、須恵器、土師器などの遺物のほか、集落遺跡についても精力的に研究を進められた。当然ながら、六国史ほかの文献史料も限なく拾い集められ、考古資料が生み出された歴史的背景についての確認を怠ることはなかった。こうした学識から、学界においても日本考古学協会理事や岩手考古学会会長などの要職を歴任されている。

平泉についても、多くの業績を残された。特に、「〔六箇郡之司〕権に関する基礎的考察」（岩手史学研究75, 1992年）は、平泉を拠点とした奥州藤原氏の領域支配を考えるうえでも、多くの影響をもたらしている。岩手大学着任後においては、「平泉」の名称の起源・由来などについて、岩手県とともに研究されていた。また、もともとの研究基盤であった奥州市周辺のみならず、2011年の震災津波からの復興支援の一助として、岩手県沿岸部においても積極的に教育普及活動を展開した。テレビやラジオなど、メディアへの出演も厭うことなく対応された。

さて、私と伊藤さんとの出会いは、1986年に奥州市で開催された「古代城柵官衙遺跡検討会」だったと記憶している。その後、奥州市内の発掘調査を担当したことにより伊藤さんとの縁がつながり、発掘中の常盤町町遺跡の水田跡をご案内いただいたりなどした。さらに、市埋蔵文化財調査センター



2014年8月 中国・成都にて

で保管されていた橋本遺跡出土資料について、伊藤さんとの連名で資料紹介をさせていただいた。伊藤さんの研究者イメージは古墳時代後期から平泉までであるが、このように、弥生時代研究についても足跡を残し、胆沢城跡から出土した石包丁の実測図も作成されている。

昨年（2022）4月1日、伊藤さんの後任として引継を受けたが、研究室には、搬出の途上にあつた段ボール30箱以上の図書などが残されていた。「そのうちに片づけに来るから。」と話されていたが、それがかなうことはなかった。几帳面な伊藤さんらしく、論文抜刷りや関係文献のコピーには背表紙が付され、丁寧に整理されていた。おそらく、冥界においても、必要な資料にすぐに手が届き、研究を続けられているのだと思う。

佐藤嘉広（岩手大学平泉文化研究センター）